

# 歌唱活動における効果的範唱にむけて — 声から見える課題を探る —

藤 田 光 子

Toward effective chanting in singing scenes:  
Exploring issues that can be seen from voices

Mitsuko FUJITA

## 【要 旨】

教員養成や保育者養成の場で、子どもたちを前に指導者が自身の声で範唱を示し、子どもたちはその範唱を聴き楽曲を覚え歌えるようになっていく場面指導を行う。教員・保育士養成校においてはこのような場面をできるだけ多く経験させるが、その際に声に関する課題は多く見受けられる。そこで本研究では子どもの前で歌う際の声に関する課題について範唱者の声・児童の声を考察し、検証する。令和3年度中央教育審議会答申では「個に応じた指導」の充実「個別最適な学び」が掲げられきめ細やかな指導・支援が求められるようになった。声は子どもとのコミュニケーションに欠かせないものであり、情動や感情、理解、認知すべてに影響を与える。そこで、改めて声による歌唱指導の原点に立ち戻り、範唱の際の課題を追求することで、声から見える課題が明らかとなり、子どもたちが自身に応じた課題を見つけ他者と協働した学びへとつなげることができるための、教師の効果的範唱への糸口を探ることができた。

## 【キーワード】

歌唱活動 範唱 模唱 声 課題

## 1. はじめに

保育の場面や教育の場面において、声を使用して歌を覚える場面や教師が声を出して子どもたちが模倣する場面は非常に多い。そこで歌われる教師の歌は「範唱」と言われるものであり、子どもたちへのお手本といったものになる。毎日の保育室や教室のなかでは何ら違和感のない

活動の1つであると言え、子どもたちにとっては聴いて覚え歌う「聴唱」は一般的である。特に幼少期や小学校低学年まではこの「聴唱」を使用することが多いが、高学年においても「視唱」と併せ「聴唱」も行われている。

しかし昨今教室でマスクを外して歌う機会が少なくなり、保育者や教育者を目指すものにとってもそのような場面の経験が少ないまま教壇に立つことも珍しくない。さらにはインター

ネットや様々なデジタルコンテンツが普及し、実際に教師や保育者が声を用いて示してみなくても、整った音源を使用することが可能となった。教師や保育者をめざす学生たちも多くはそれらを活用していると思われる。また、養成校の学生についてもここ数年で大きく状況は変化している。初めて音楽を覚えるときに動画を見て覚えるというものが非常に多くなった。その中でも YouTube 等による動画の視聴は、日常的に行われている。【表1】では令和3年度保育者・教育者をめざす学生調査からもわかるように動画視聴が最も多く、その他では「先生が歌うのを聴いて覚える」「楽譜を見る」「他の人の声を聴いて覚える」等があげられている。手軽に音源を視て聴くことのできる便利さは、教育の世界にも多く波及していることは明白である。

しかし、子どもたちの前に立つ保育者や教育者は、子どもたちの前で歌唱することは避けて通れない。わらべうたや歌曲、手遊び歌など多くの楽曲を範唱したり、歌唱したりすることは常に求められている。また中央審議会答申では「個に応じた指導」の充実が求められ、子どもたちにとって「個別最適な学び」が掲げられより細やかな指導・支援が求められている。それら今日的課題として歌唱指導の原点に立ち戻り、児童の声による「聴唱」の傾向を確認、さらに学習した楽曲を子どもたちの前で「範唱」してみせることから見える課題を声に着目し、より効果的な範唱につながる道筋を検証する。

## 2. 効果的範唱とその他の背景

教師が歌唱指導する際に用いられる方法として、「口授」「聴唱」「視唱」等があげられる。これらは史的に見て教育現場において教授法のなかで用いられている指導法の1つであるが、現在においても用いられ今日でも変わらずこの教授法は継承されている。「口頭伝承」を主にした伝承的歌唱も現在まで伝わっておりその1つである。「視唱法」という楽譜を見て歌を覚える方法は比較的高学年に向かい楽譜を見なが

ら歌う際に用いられる。幼少期の歌を覚える過程においては、石川氏によると次のように記されている。幼児は楽譜を見て歌うわけではない。幼児が歌を覚える過程は、それがマスメディアを通じたものであれ、養育者や保育者からのものであれ、きょうだいや友達からのものであれ、ほぼ、「ひとの歌う歌を聴いて」覚えていくもの(2020石川)<sup>1)</sup>つまり幼児期と学童期においては多少の違いがみられるが、子どもたちが「歌を覚える」という行為は人から発信されたものを模倣することから始まる、コミュニケーションの一部であるといえる。

本研究ではまず「口授法」による「範唱」に注目する。小学校や幼稚園・保育所等多くの場面で、この教師や保育者の範唱に基づいて歌唱を行う。特にここでは将来教師や保育者をめざす学生の傾向として範唱がどのように学習し歌われているか、またその傾向からどのような指導が必要であるかを含め声による課題を探ることとする。

小学校学習指導要領音楽2内容A表現では、学年を追うごとに次のような技能を身に付けることが記されている。<sup>2)</sup>

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>(ア) 範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりする技能</li> <li>(ア) 範唱を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たりして歌う技能</li> <li>(ア) 範唱を聴いたり、ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして歌う技能</li> </ul> |
|---|

### 【小学校学習指導要領 音楽】

範唱は教師による範唱のみとは明記されていないが、CDなどの音源で聴く範唱以外に教師が範唱する場面は非常に多い。ワンフレーズずつデジタル動画や音源等を使用することは、音楽の指導の中では考えにくい。学習指導のなかでは教師が歌うことが想定されている。

一方、現在多くのデジタルコンテンツやICTによる範唱が示されており、教師や保育者の助けとなっている。代表的なものはCDによる音源の使用があげられる。また、YouTubeや動画教材からもお手本として参考にするケースは多い。特にICTの導入により、手軽に使

用できるツールの一つとなった。

小中学校の教科書においては、令和2年度版よりQRコードにより共通教材や学習サポート教材の閲覧ができるようになり一層ICT活用の学習は定着してきている。

さらに文部科学省では現在小学校音楽における学習支援コンテンツとして次に提示されたものがある。その中には歌唱の指導や活動に必要なコンテンツとして記されている。学習者が自身で学習できるもの、さらには授業内でも使用可能なものがあり活用用途は広い。

学習支援コンテンツにおける歌唱分野では、「作曲者の伴奏で歌おう」「作者からのメッセージ」では教科書に登場する楽曲の作曲者からのメッセージが収録されている。「おんがくブラボー」では歌い方の基礎が番組として蓄積されている。「音楽調べ隊」では調べ学習の際のキーワードが掲載され、「舞台芸術教材で学ぶ」では様々な舞台芸術の音源やLibraryとしての機能を持っている。

これらのデジタルコンテンツを使用する場合においても、教師による「範唱」は存在していないわけではない。その際子どもたちの前での「範唱」に求められるのは、「子どもへ伝わる歌声」「音高の再生ができているか」「模倣をする子どもにわかりやすく伝承できているか」等様々に課題があげられる。その中でも特に求められるのは、楽曲を再生する力である。デジタルコンテンツの強みともいえるが、その良さは楽曲を再生における正確さ、復唱させることができるもしくは何度も聴きなおしができることは言うまでもない。人間の声での範唱は、不安定さもあるものの、範唱者への親近感と双方ともに声を出しているという安心感がある。必ずしも楽器の音や音源と同じように歌唱しなければならぬという不安やうまく歌わなくてはならないという危機感が軽減される。動画や映像の模倣をするのではなく目の前の範唱者の模倣をすることに少なからず意味がある。

### 3. 調査

範唱に伴う声や歌唱に関する課題を探るにあたり、保育者・教育者を旨とする学生に関する以下の3点における調査を実施した。

#### (1)音楽の指導に関する困り

教員・保育者養成校学生30名

令和元年度5月調査

自由記述におけるKHコーダーによる抽出語の傾向

#### (2)歌唱経験

教員・保育者養成校学生167名

令和元年～令和4年度調査 9月

#### (3)歌唱調査：歌唱聞き取り

教員・保育者養成校学生30名

令和元年度12月調査

\*各調査において個人情報に配慮のうえ本研究のみに使用し、本人を特定できない形でのデータ使用に許可を得て使用している。

### 4. 検証と考察

調査からわかる傾向としては、(1)については、音楽を指導する際の困りについて尋ねたところ、「授業が不安である」以外に「歌」「楽器」「ピアノ」についての文言が抽出されていることがわかる。これらの抽出語の記載からさらに詳細を見ると、歌唱に関する記載では「自分が歌うことが苦手」「子どもが歌ってくれるか」「楽しく歌わせることができるか」「歌うことに自信がない」「なぜ歌わなくてはいけないか説明できない」「歌を教える自信がない」「自分が歌うことを苦手だと感じている」という歌唱に関する困りが最も顕著に見られた。この内容には自分自身の技術的困りと児童がどう反応するかという児童への伝わり方や活動の充実に関する不安の2つの傾向がみられる。まずは子どもの前で歌唱する技術的困りである「範唱」を行う側の課題解決つまりは一人で「範唱」ができるようになる取り組み強化が必要になる。歌唱経験が少ないことがその一因であると思われる。

る。さらにここでは一方の困りの解決が他方の困りである児童の指導に関する不安の払拭につながる。

さらに(1)とも関連するが【表2】にあるように人前での入学までの歌唱経験についてはどの学年も歌唱経験ありは10%前後であった。つまり、合唱などを除き人前で1人で歌って見せる経験をほとんど有していないことがわかる。声を出す機会が少なく、弾き歌い等の学習が始まるまでの独唱の経験は非常に少ないことがわかる。

(3)については「音楽」の授業内で1人ずつ独唱する場面においての音高に関する調査を行った。楽曲練習は授業内外において10回以上歌唱している楽曲についてであり、全員唱の場合の問題は顕著に見られない。【表3】にあるように歌い始めの音を提示したうえで、歌唱を開始するが、独唱の場合約半数に歌い出しの音の揺れが見られ、歌い出しの音高の揺れは顕著であった。途中の音程の揺れについては、歌い始めの揺れほどではないが全体の歌唱へ影響していることがうかがえる。歌い始めや途中段階の音程の揺れが顕著でない場合でも、その楽曲全体として音程が不完全な歌唱となっている例も見られた。

さらに今回は検証の対象としてないが、声量に関する点にも課題が見られた。声が鳴りきらないままの歌唱が進められ、十分に豊かな響きを得ないまま歌唱している事例である。子どもたちに伝えるための歌唱における声量については今後教育現場での検証と併せ課題とした。

## 5. 児童による模唱実践

山内(2019)によると小学校の歌唱教材においては1オクターブ以内に収まる楽曲を中心に掲載されているが、高学年においては1オクターブを超える楽曲の掲載が示されている。このことから概ね1オクターブの幅においての児童が教師の声を模唱した場合の声の状態について検証する。次に高学年児童の声の状態から複数回の範唱による模唱を録音し、その大まかな

傾向と課題を考察する。

### (1) 範唱による児童の模唱

①音域確認 児童が自然に発声できる音域の母音による調査。令和4年8月

②5段階の模唱状態の各8回の実施のうち4回目～8回目の5回による傾向観察

\*各調査において個人情報に配慮のうえ本研究に賛同した本人保護者へ許可を得て使用している。

### (2) 声からみえる課題の考察

ここでは一斉歌唱ではなく、児童の声による模唱の状態を調査したものである。同じ内容を複数回繰り返すことではじめの3回は慣れていないため状態把握に至らなかった。

【表5】にあるように単音の聴唱は全く問題なく模唱することができ、2度音程においては各人の声域による境界音付近での揺れが見られるものの、基本的に安定した発声であった。声のチェンジする境界音においては若干の揺れが見られたが、模唱そのものは安定していた。後半調査の1オクターブ4音による旋律では歌い始めに両者ともに揺れがみられた。また、4小節の模唱の際では、直前の小節における音に引かれてしまい、歌い始めに影響が出ていた。この結果は学生の歌唱においても見られた傾向であり、本調査の回数を重ねても大きな変化が見られなかった。聞き覚えのない楽曲に対する範唱を効果的に行う必要がある。

## 6. 範唱者による実践事例より

調査と児童による模唱により声の傾向と課題が見えてきた。これらを踏まえ、保育者・教育者を目指す学生の「範唱」の事例として模擬授業内で実施された「範唱」について紹介し、ここでは特に顕著に見られた傾向を提示する。



## 6-1. 実践事例

## 【楽曲事例1】茶つみ 文部省唱歌

指導者	1・2・3・4 うん なつもちーかつく はーちじゅうはちや さんはい
子ども役	なつもちーかつく はーちじゅうは ちや

4小節の1フレーズずつ指導者の範唱に次いで子どもたちが模唱する模擬指導場面。休符は子どもたちが感じ取りやすいように「うん」や「さんはい」を挿入テンポよく歌いやすいように範唱している。比較的共通教材等の耳なじみのある楽曲については範唱した際の音程のずれは少ない傾向にある。歌唱経験や鑑賞経験が「範唱」に影響を与えている。

さらに4小節目の休符に「さんはい」と入れることで、繰り返しを行う子ども役は1小節目の休符の間隔もすでにとっていることになり、楽譜上視唱していない場合でもテンポよく模唱することができている。この楽曲の特徴である弱起をうまく活用し、テンポよく範唱することができている事例である。ここでの課題としては6小節目の「のにもやまにも」の音程の間違が多くみられ、7小節目と同じ音程での歌唱が多く見受けられる。

これは耳で聞き覚えのままの歌唱になっており教師は楽譜視唱による十分な練習が必要となる。これは範唱者にも多く見られ、再生する力という面から考えると正確に表現すること、自身が違った歌唱をしていることを認識する必要があると言える。

## 【楽曲事例2】しろくまのジェンカ 平井多美子日本語詞/ケン ウォール作曲

指導者	1・2・1・2 かあさんのしろくまさんはさんはい
子ども役	かあさんのしろくまさんは
指導者	のそのそ どたばたばったん さん はい
子ども役	のそのそ どたばたばったん

「しろくまのジェンカ」のように学習開始時に楽曲を知らない場合の範唱は非常に不安定になる傾向が見られる。歌い始めのFの音と4

小節目のFの音が同じであるにも関わらず、4小節目から1小節目に戻った際教師役の「範唱」も不安定な歌唱となっている。さらに5小節目のGについても同様の傾向が見られ、8小節目から5小節目に戻った際も同様の音であるにもかかわらず安定していない。また、「さんはい」という声かけが拍子に伴っておらず、歌い始めにくい。さらに、楽曲途中における音程のずれも解消されないままの歌唱となった。これは、範唱を実施したすべての模擬指導者において同様の傾向が見られ、児童役の模唱においても同様の傾向が見られた。対象を想定し、発声した練習が十分でなく、課題が見られた際の声以外の指示を取り入れる等の工夫が必要になる。

調査と実践事例による傾向から、範唱における想定される課題要因は①音程・音高②速度③音量④拍子⑤対象を想定した練習があげられる。特に⑤については①～④の要因のすべてにおいて該当する課題であり、理論面だけではない課題が見られる。

## 6-2. 音程と音高について

【表4】から最も顕著に見られたのが、音高を変えて範唱する例である。範唱場面でよく見られるが、子どもたちの歌いやすい調（キーを下げるや上げる）などして演奏する例である。子どものうたは比較的音が高い傾向にあり、へ長調を二長調で歌う、3度ほど下げて範唱する例もしくは意識的ではないが少し下げて歌うことを想定し、2度下げて歌唱する様子が見られた。

ここで課題となるのは調を変更することではなく、音高を下げた際、もしくは音高を上げた際に、正確にその調における旋律で歌唱できているかどうかである。1つの事例として、音高を変化させ低く歌い始めたものの、元の旋律通りに歌うことができず、あいまいな音程のまま範唱を続ける場面が見られた。これらは範唱者自体がその音高での歌唱練習が十分でない場合に見られる。また楽器を使用した歌唱と連動していく場合、声のみで歌っている調と楽器によ

る伴奏を入れて歌唱する際の乖離から歌いづらくなる傾向にある。

### 6-3. 速度について

初めての歌唱の際、まずは範唱として音源等を使用し、楽曲理解のための視聴が必要となる。その後の歌唱練習に際しては、子どもたちが聴き取れ、模唱しやすいテンポにて演奏することがある。今回の【表4】事例においては音源使用後の指導者による範唱の際、ほとんどが1度も範唱のテンポを落としていないことがわかる。

速度を落とさずに演奏を継続した場合、全体像はとらえやすいものの、歌えていない部分がある状態で歌唱練習が進められており、正確な歌唱ができるようになるまでに時間を要し、さらには間違った音程にて歌唱回数を重ねていくことになる。さらに前項で記した範唱の実践事例のように、フレーズごとに分けて歌唱練習をするが、実際には範唱者である教師がその練習について不足していることがうかがえた。子どもたちや児童役の学生も歌いづらい状況で歌唱の改善が見られない。まずは歌唱のために適正なテンポを示すことと楽曲本来のテンポで歌えることへの繋ぎも学習段階で必要となってくる。

## 7. 今後の課題と方向性

本研究では、「範唱」に着目し、保育者・教育者を目指している学生の調査から、範唱場面に向かう声による課題を児童の模唱の傾向とともに探ることができた。範唱場面の課題を取り上げることで、さらに学習段階での教育・保育場面での声に関する課題が多いことも明らかとなった。音楽活動の中の1つの入口的な活動ではあるが、個に応じた指導や学習活動の提供を行うこと、歌唱表現に対して子どもたちが主体的に学ぶことへの手助けとなることは重要であると考えられる。指導するものの課題としては実際に体験する場面を増やすこと、さらには技術的に範唱の方法を得て経験すること、うまくいかない歌唱を経験し、改善していく実践を増やす

ことが重要であることが見えてきた。

昨今は教室での歌唱に制限があるなど歌唱場面が非常に減少している。しかし徐々に歌声が教室に戻り始めていることも事実である。さらに動画視聴等うまく活用しながらの音楽活動も定着しつつある。しかしながら保育者・教育者にとって子どもの前で範唱することは必須であり、一人で声を出す場面やその練習の積み重ねは必要不可欠である。

子どもたちが豊かな声で歌唱できるよう、さらに歌唱活動が深い学びへとつながるよう、指導場面における声に関する課題を、引き続き追求し、今後の研究の方向性としていきたい。

【表1 使用ツール】 n=32

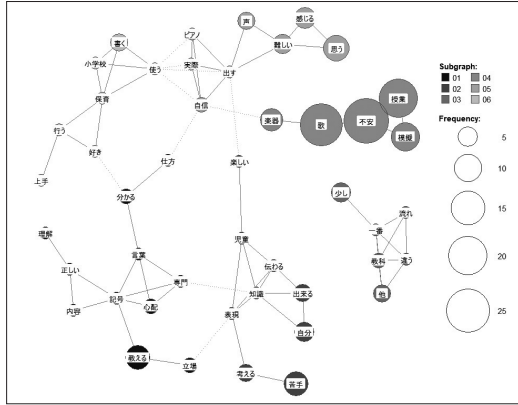
	回答	人数	%
1	動画	12	40
2	音源	9	30
3	楽譜	7	17
4	先生や友達	4	13

【表2 独唱経験】 n=167

	ある	なし	無回答	計
令和4	4	26	4	34
令和3	3	36	4	43
令和2	6	36	5	47
令和元	4	33	6	43

【表3 独唱による音の揺れ】 n=30

楽曲	歌い始めの音	歌い出しの揺れ	途中音程の揺れ
コールユーブンゲン No. 19d	G	6	6
コールユーブンゲン No. 37a	G	9	5
合計		15	11



【図1 音楽指導に関する困り】

なつもち かづく はちゅう はちや  
 ひより つづきの きょうこのころを  
 のにも やまにも わかばつ しげら  
 こころのどかにもつみうたう

【楽譜1 茶つみ 文部省唱歌】

【表4 模擬指導における範唱の回数と課題傾向】

	範唱による 歌唱回数	速度	音高	音程	楽器の 使用	音源	拍子 指示
1	4	遅	低	不正確	なし	1	なし
2	2	遅	低	不正確	なし	1	なし
3	2	音源速度	調	正確	初めの音	1	あり
4	2	音源速度	高	不正確	なし	1	なし
5	3	音源速度	低	不正確	なし	2	なし
6	4	音源速度	低	不正確	なし	1	なし
7	5	音源速度	低	不正確	なし	2	なし
8	6	音源速度	低	正確	なし	2	あり

【表5 児童による模唱】

		児童①	児童②
音域確認			
提示音		主な傾向	主な傾向
単音(10音)	単音	模唱に問題がなく安定した発声	模唱に問題なく安定した発声
2度音程	2音2度音程	上行下行ともに安定しており、声域の境目付近では十分な発声ができない	上行下行ともに安定しており、中声域の境界音にて揺れが見られる
3度音程	2音3度音程	上行下行ともに安定しており、声域の境目付近では十分な発声ができない	上行下行ともに安定している
簡単な旋律	4音による末聴の旋律	歌い始めの音に揺れが見られる	歌い始めの音に揺れが見られる
楽曲による	4小節の末聴の旋律	直前の2小節に引かれ歌い始めの小節の音が不安定な音程になる	直前の小節に引かれ歌い始めの小節の音が不安定な音程になる

### 【引用文献】

- 1) 石川眞佐江 幼児の並行遊び場面における歌の機能—かかわりの生成に着目して—静岡大学教育学部研究報告 2017.3 p72
- 2) 小学校学習指導要領 音楽平成29年
- 3) 文部科学省小学校音楽における学習支援コンテンツ [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/ikusei/gakusyushien/mext\\_00045.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/gakusyushien/mext_00045.html)

### 【参考文献】

- 1) 小学校学習指導要領音楽編平成29年
- 2) 山内隆雄 小学校歌唱教材の音域と旋律についての考察 2019年九州ルーテル学院大学紀要
- 3) 今川恭子 わたしたちに音楽がある理由【音楽性の学術探求】音楽の友社 2020年
- 4) 文部科学省「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申） 令和3年

### 【楽譜・楽曲】

- 1) 小学生の音楽 1～3 平成30年教育芸術社
- 2) KAWAI スコアメーカー10
- 3) 教育芸術社 <https://www.kyogei.co.jp/textbook/es/es-r2/qrcode.html>